

自死・自殺に本気で向き合う
公開シンポジウム

続

比較 社会 漂流記

入場無料
申込不要

死にたい

昨年と会場が
違います！

2019年

9月7日土

13:30～16:00 (開場13:00)

京都市男女共同参画センター

会場

ウイングス京都

2F イベントホール

京都市中京区東洞院通六角下る

※一般来館者用の駐車場はありませんので、電車・バスをご利用ください。

小林エリコ NPO法人コンボ職員・作家

登壇者

松本俊彦 精神科医

竹本了悟 NPO法人京都自死・自殺相談センター代表

野村清治 リメンバー名古屋自死遺族の会 代表幹事 (共同)



主催：特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター お問い合わせ先：☎075-365-1600 ✉so-dan@kyoto-jsc.jp

今年度のテーマは昨年度、好評を頂いたシンポジウム「比較社会漂流記」の続編です。この「比較」というものは、生きていく中で誰もが気が付かないうちにしていることであり、誰しも逃れられないテーマです。

前回のシンポジウムでは、抱えきれないほどの苦しみを一人で抱え込んで「孤独」になっても、死にたいほどのつらさを分かってくれる人や、気持ちを聞いてくれる人が近くにいてくれるだけで、孤独にまつわる苦悩が和らぐことに繋がっていくことがみえてきました。そして、“みんな弱さを抱えている”、それは誰だって一緒なのだということを共有しました。

比較にまつわる苦悩について、特にSNSやインターネットを中心に前回はお話しが進んでいきましたが、続編である今回は、普段生きていく中（生活、職場、

学校など）で比較される、死にたいほどの苦しみについて登壇者のみなさん、会場のみなさんと共に更に深めていけるシンポジウムにできればと思います。

死にたいほどの苦悩を抱えた時、生きたいけど死にたいとしか思えなくなった時、そんな時に、登壇者のみなさんは、どんな思いを持って、その問いに回答してくれるのでしょうか。前半はテーマに沿って、後半は来場者の質疑を中心に登壇者のみなさんに応答してもらう二部構成のなかで、生きづらさや死にたい気持ちに向き合い続けてきた登壇者と一緒に、今年度もとことん考えます。

※前回お越しになれなかった方も、ご参加いただけます。

このシンポジウムは京都府自殺対策事業補助金を受けて開催します。

登壇者（敬称略）



小林エリコ

NPO法人コンボ職員・作家

1977年生まれ。茨城県出身。短大を卒業後、エロ漫画雑誌の編集に携わるも自殺を図り退職。その後、精神障害者手帳を取得。現在も精神科に通院しながら、NPO法人で事務員として働く。ミニコミ「精神病新聞」を発行するほか、漫画家としても活動。自殺未遂の体験から再生までを振り返った著書「この地獄を生きているのだ」（イースト・プレス）が大きな反響を呼ぶ。エッセイ「わたしはなににも悪くない」（晶文社）より刊行。大和書房webにて「家族劇場」連載中。



松本俊彦

精神科医

1993年佐賀医科大学医学部卒業後、国立横浜病院精神科、神奈川県立精神医療センター、横浜市立大学医学部附属病院精神科などを経て、2015年より現職。日本アルコール・アディクション医学会理事、日本精神科救急学会理事、日本青年期精神療学会理事。主著として、「自分を傷つけずにはいられない～自傷から回復するためのヒント」（講談社、2015）、「もしも「死にたい」と言われたら～自殺リスクの評価と対応」（中外医学社、2015）など。



竹本了悟

NPO法人京都自死・自殺相談センター Sotto代表

広島生まれ。浄土真宗本願寺派西照寺住職。防衛大学校卒業後、海上自衛隊に入隊するが僧侶となるため退官。龍谷大学大学院で真宗学を学ぶ。浄土真宗本願寺派総合研究所研究員を経て、現在、TERA Energy 株式会社代表取締役。2010年に京都自死・自殺相談センター Sottoを10名の仲間と設立、代表を務めている。

野村清治 リメンバー名古屋自死遺族の会 代表幹事（共同）

コーディネーター

自死遺族当事者として、さまざまな自死遺族のわがちあいに参加し、また遺族会の運営に加わる。死にたい思い、遺族の思い、自死そのものについて、模索しながら現在に至る。Sotto とは立ち上げ時より関わりを持ち、2017 年より理事。

タイムテーブル

13:00 開場

13:30 開始

（途中に休憩あり）

16:00 終了

16:10 ボランティア説明会

2019(平成31)年度 第11期ボランティア募集

申込受付 9月1日開始

講座 10月開始

京都自死・自殺相談センターで共に活動してくれるボランティアを募集しています。

Sotto は自死の苦悩を抱えたときの心の居場所をつくる団体です。自死念慮者への電話やメール相談窓口、大切な人を自死で亡くした方への語りあう会の開催、一人でも多くの方への自死に関する情報を届ける発信の活動を柱としています



当日は、来場の皆さまが対話へ参加できるように、随時、質問用紙を受け付け、会場のスクリーンにはツイッターをリアルタイムで表示します。そして、その内容を登壇者間の対話の中に取り込むことで、会場全体で一緒に考える機会にしたいと考えています。ツイッターのハッシュタグは「#Sotto_sympto」で、ツイートしていただくことで当日の対話に、今からご参加いただけます。

